

奥矢作湖畔でさくらまつり

矢作ダムの奥矢作湖畔にある串原大野公園で、4月12日に恒例の「奥矢作さくらまつり」が、同実行委員会の主催で開催されました。

この日は汗ばむほどの晴天に恵まれ、散り始めた桜吹雪の中で、約300人の観衆が歌謡ショーや鳴子踊り、カラオケ大会などを楽しみました。歌謡ショーでは、市観光大使の嶺陽子さんが「血山情話」や「ソウダニくしはら」の新曲を発表し、大いに盛り上がりました。



鳴子踊りを披露する串原の「翔舞」の皆さん

明鉄沿線を花いっぱい



植栽の作業をしている明智町明知鉄道協会の皆さん

明知鉄道の明智駅と野志駅の間で、4月10日に明智町明知鉄道協会(横田晴彦会長)の約15人が、県から無償配布されたヤマザクラ10本とサルスベリ10本の苗木を植栽。鉄道敷の斜面に穴を掘って植えた苗木は、高さ1.5から2mあり、打ち込んだ竹の棒で補強をしていました。

協会の皆さんは、明知鉄道の沿線が花いっぱいになり、たくさんの方に乗っていただける鉄道になるようにと願い、作業に汗を流しました。

ふるさとの先人に学ぶ

10月の佐藤一斎歿後150年祭(おうめい)フォーラム in 恵那の開催に向け、同フォーラムのPRと地元の先人である佐藤一斎を深く知ってもらおうと、「一斎塾」が4月から順次、全国各地で開催されます。

第1回目となる同塾は、4月12日、恵那文化センターで開催されました。講師は、NPO法人いわむら一斎塾の顧問徳増省允さんが務め、「一斎の言志四録には生き方が書かれている。素直な心で読んでほしい」と、約90人の来場者に訴え掛けました。



佐藤一斎について講演する徳増さん

復活後25回目の「孔子祭」



儒学の講話をする岐阜女子大学の近藤教授

岩村歴史資料館前の知新館正門で、儒学を興した学問の祖・孔子をまつる孔子祭(釈奠の儀)が、4月11日、関係者ら約60人の出席で行われました。

釈奠の儀は、明治維新後に文武所(後に知新館と改名)が廃校になるまで、166年間続けられたもの。途絶えていたこの儀式を、昭和60年に岩村城創築800年を記念して復活させ、今回で25回目の開催。式典の最後には、岐阜女子大学の近藤正則教授による講話があり、皆さん熱心に聞き入っていました。

地域と連携した団員確保

まきがね公園体育館で、4月5日、市消防団の辞令交付式が行われ、地元自治会役員や消防関係者ら約90人が出席しました。新たに入団したのは73人で、うち女性消防隊員は6人。同団は、総勢1,262人の体制となりました。

ことしは式典の後、13分団それぞれの分団長による意見発表会がありました。団の活動が地域のつながりを強めていくことや、団員確保の重要性などを、来場者に訴えました。



自治会役員を前に意見を発表する分団長

ライオン広場に来てね



テープカットをする可知市長と利用客ら

恵那ライオンズクラブからの100万円の寄付金と、県の補助金を活用し、こども元気プラザにライオン広場が完成しました。3月26日、竣工式が行われ、同プラザを利用する親子ら、約30人が参加。

同広場は、約170平方メートルの敷地に砂場やウッドデッキ、ベンチなどが備えられ、夏には簡易プールなどで水遊びもできます。式典で、可知市長は、「子どもには、元気に遊んでほしい。外で遊べる空間に感謝したい」とお礼を述べました。

旧三宅家の前でもちつき

明智町の大正ロマン館の上にある市有形文化財の旧三宅家で、4月5日、日本大正村の主催で「土びなもちつき大会」が開催されました。

旧三宅家は、ことし2月から3月の約2カ月掛けて、すべての「かやぶき屋根」をふき替えました。この日のもちつき大会は、屋根の完成披露も兼ねて、地元の明智町のもち米を使って行われました。つかれたもちは、黒ごまやきな粉をまぶして、観光客などにふるまわれました。



力強くもちつきをする明智小学校6年生の加藤椋くん

ホタルの飛び交うまちに



ホタルの放流を行う長島町子どもたち

3月29日、長島町まちづくり委員会環境部会は、町内の永田川など4カ所にゲンジボタルの幼虫を放流しました。同町では、「ホタルの飛び交うまち」を目指し、河川の清掃やホタルの飼育などに力を入れています。4年目となるこの活動は、県でも認められ、ぎふ・ふるさとの水辺に認定されました。

放流したホタルは、6月下旬から7月中旬にかけて成虫として飛び交い、水辺付近は幻想的な光に包まれます。

狂歌入東海道 - 「保永堂版」後の広重

中山道広重美術館
特別企画展覧会

会期

4/9(木)～6/14日(日)

4/29(木)～5/6(水)は休まず開館

開館時間 午前9時半～午後5時(入館は午後4時半まで)

観覧料 ▷大人=800円(団体650円)▷小・中・高校生=500円(団体400円)
毎週月曜日(祝日を除く)
祝日の翌日(土日・祝日を除く)休館。5/11(月)～13(水)は展示替えのため休館

問い合わせ 中山道広重美術館 ☎20-0522



歌川広重
「東海道五拾三次
(狂歌入東海道)原」

1830～1844(天保後期) 年
当館蔵

新収蔵品、佐野喜版『東海道五拾三次』のお披露目展示です。このシリーズは画中に狂歌が添えられているため、通称「狂歌入東海道」といわれます。展覧会では同時期につくられた行書東海道と最晩年の『絵巻東海道』など、各種東海道シリーズも併せてご覧いただけます。

6月7日は「市民の日」

毎月第1日曜日を「市民の日」とし、市民に限り観覧料を無料としています。

文化財を巡る ①古代の恵那～二つの古代寺院(その5)

出土瓦から存在が判明～手向廃寺跡

古代恵那郡を考える上で、正家廃寺とともに見ることができないのが山岡町上手向にある手向廃寺です。小里川沿いの低地を見渡す台地上にあり、周辺には古墳も多数分布することから、古代淡気(手向)郷の中心的な集落があった地域ではないかと考えられています。

寺跡は、昭和41年、山岡小学校が新設され、その通学路の拡張工事中に布目瓦が見つかったことにより、その存在が確認されました。その後、周辺でも多数の平瓦、丸瓦が採集され、昭和52年には、推定寺域が町の文化財に指定されました。

昭和61年、町の集落道整備事業の一つとして道路の拡幅工事が計画され、道路予定地約660平方メートルの発掘調査が行われました。その結果、奈良時代の溝敷本と礎石1個、基壇状遺構、掘立柱建物状遺構などが確認されましたが、調査範囲が限られており、遺構の残り具合も悪かったことから、寺域の北辺らしき一部を検出したことを指摘するにとどまっています。

寺跡推定地は現在、畑地、草地となっており、地表では何も確認できませんが、地下には遺構が残っている

可能性があります。周辺には、古代、中世の遺跡や寺名や坪名のつく字名もあり、手向廃寺の実態解明のみならず、古代の恵那郡の歴史を探る上でも地域全体の専門的、総合的な調査が望まれます。

問い合わせ 文化課 ☎43-2112(内線217)



出土した瓦の一部は山岡陶業ギャラリーに展示されています

長らく愛読いただきました「文化を巡る」は、6月からの紙面改訂に伴い終了させていただきます。

ハーフマラソンを力走

4月19日、第8回恵那峡ハーフマラソンが、クリスタルパーク恵那スケート場を発着点のメイン会場として、同大会実行委員会と東濃地区陸上競技協会の主催で開催されました。

好天の下、市内外から1,553人のランナーが参加。前回の大会から、日本陸上競技連盟の公認として認定されたハーフマラソンのコースには、758人のランナーが挑戦しました。総合優勝は、長野県松川町から参加した松山克敏選手(35歳)でした。



ハーフマラソンで先頭を力走する松山選手

生ごみが消える魔法の箱



生ごみ堆肥化のコツなどを説明する傍島さん

市民有志5人で活動している「まちの小さなエコグループ」(安藤富貴子代表)は、ダンボール箱で生ごみを堆肥に変える取り組みを広めようと、4月14日、商店街振興組合事務所などで、堆肥化のための講習会を開催しました。すでに取り組みを実践している大垣市環境市民会議の傍島潤子さんが、講師を務めました。代表の安藤さんは「自分たちの暮らしの中でエコを楽しみ、それが住みやすい町につながれば、うれしい」と話していました。

地域移送サービス始まる

中野方町で、町内の移送を車で行う「中野方地域移送サービスおきもり」が、4月22日の出発式より運行を開始しました。このサービスの運営は同町のまちづくり委員会で、開始時に登録したボランティアの運転手23人により、毎週月・水・金曜日に、町内のどこでも無料で送迎を行います。

名称の「おきもり」は、「お手伝い」という意味を持つ中野方の方言。お年寄りなどの1人で移動できない方を対象に、地域の移動を手助けします。



最初のお客さんを乗せて運行開始した「おきもり」

笠置町の「ゆずもちゃん」



ユズをイメージしたキャラクター「ゆずもちゃん」を発表

笠置町活性化委員会と市観光協会笠置支部は、同町のイメージキャラクターを「ゆずもちゃん」に決定したことを、4月15日に発表しました。

このキャラクターは、同町で収穫できるユズを地域の特産品として広める目的で、18種類のデザインを作成して人気投票を実施。ゆずもちゃんは、投票総数1,039票のうち約25%を獲得。関係者は「今後、キャラクターを利用して、ステッカーやぬいぐるみなどを作成していきたい」と話していました。